真実院大瀛・石泉僧叡　著

十倍素早く読める

大行義・柴門玄話

名著復刻堂

大行義（抄）

所行大行

真実行とは、謂く、至徳の尊号なり。是れ如来回向の無碍の行なるが故に、行者の口称を須って方に行名を得るに非ず。行文類所詮の旨趣此に在り。何を以て之を知るとならば、五願立宗の義正しく爾るが故に。

謹んで按ずるに、宗祖五願に依って真宗を立し給ふものは、深く第十八願成就の文旨を得給へるなり。経に曰く、聞其名号とは、次上の経文に十七願成就を説くを、是を所聞と為す。教行の二法、是に於て得、聞名信喜は是れ十八願成就の体なり。大信の一法是に於て立つ。

如来、不可思議の至徳を全うじて衆生に回向す。所謂「以大荘厳具足衆行、令諸衆生功徳成就」是れなり。然るに其回向は必ず名号を須ふ。しからざるときは能く衆生の聞信に入ることなし。是に於て全徳施名して諸仏をして称讃せしむ。往相回向を以て十七に名くるは此が為なる故なり。

称聞行信

然るに至徳より一たび名号を成ずるに二種の相あって、大用を十方三世に施す。何者か二相なる、曰く**称**、曰く**聞**なり。

称は十七諸仏の任に在り、**聞**は十八衆生の所事に在り。聞は必ず称に由る、徳を全うじて名に施す所以なり。是を以て称名とは衆生所聞の法にして、衆生一たび聞いて亦能く称名す。聞後の称名は義、所聞に帰す。是故に亦此中に在って之を摂す。具さには下に論ずるが如し。

大行釈名

問、回向の法体、何故に行と名くるや。

答、竊に聖訓を按ずるに、行に五義あり、

①修行の義

一に、修行の義。

謂く、弥陀因中に大行を修満する。

②口業の義

二に、業は是れ行の義。

謂く、弥陀果上の口業功徳を名けて大行と為す、名号是れなり。行文類に経を引いて云く「我至成仏道、名声超十方、乃至説法獅子吼」

三に、施行の義。

謂く、回施衆生は即ち是れ行の義なり。行文類に経を引いて云く「為衆開法蔵、広施功徳宝」

四に、流行の義。

行文類に経を引いて云く、「究竟靡所聞」等と、又讃を引いて云く、「如来尊号甚分明、十方世界普流行」と。

五に、道は是れ行の義。

謂く、本願の大道を名けて大行と為す。道能く人を運ぶ、衆生之に乗ずるを即ち行と名くる。

又、此五義を要束して三と為す。

初の二を合して一修行の義と為す。因果不二、唯是れ行なるが故に。（例へば台家の行一の如し）

次は、則ち施行に流行の義を該す。流行は是れ即ち施行の相なるが故に。

三は、大道の義なり。

初義は本に在り、後義は末に被る、施行は中に在って本を全うじて末を成ず。信巻至心釈は、修行の義を詳かにするなり。行巻他力釈は、施行の義を詳かにするなり。一乗海釈は、大道の義を詳かにするなり。（大道は即ち是れ仏の果道なり、この道は無碍なるが故に、果道を全うじて因道を成ずるなり、所謂、阿弥陀仏即是其行是れなり）

然るに古老のただ能行所行を以て之を言うは、何ぞ其れ疎浅なる、何ぞ他力の深義を語るに足らん。今宗の能行所行とは、他力回向の大行を以て所行の道となす。一心相応する、是を如実修行と為す。此は大信は不行の行なるが故に。口称を能行と為すと言う若きは、是れその末のみ。

③施行の義

④流行の義

⑤大道の義

❶修行の義　①②

❷施行の義　③④

❸大道の義　⑤

会通出体

○称名三義

一、諸仏称名

二、聞名信心

三、信後口称

問、若し爾らば、何が故に「大行者称無碍光如来名」と云うや。

答、此は是れ釈義の善巧にして寓意深し、今先づ称名の義を詳かにし、次に文意を解せん、称名に三義あり。

一に所聞の法体なり、諸仏称名是れなり。

二に聞名信心なり、如彼名義の故に、行巻に称の字を註して云々するもの是れなり。

三に信後の口称なり。

如実讃嘆の故に、称名に此三義あり、故に行巻に云く、「称名能破乃至南無阿弥陀仏即是正念也、可知」と。

○正釈文意

次に正しく文意を解すれば、此一句の如きは即ち是れ首に標して、諸仏称名といふもの是なり。

［本行末行］

然るに義意を闕ふに、一切の称名に通ず。蓋し本を以て末を摂し、末に寄せて本を顕さんが為なり。

本は謂く名号、**末**は謂く称念、本末相依って他力の深義顕る。

○摂末帰本

云何が本を以て末を摂する。

法体大行、誰か能く之を掩はん、この本処に於て末（衆生）の口称を摂し、末を本を出でず。

此に三意あり。

一、如実讃嘆

一に、如実讃嘆を顕す。

信後の称名は、即ち是れ如実讃嘆にして諸仏称名に同じ。常行大悲は是れ信者の大益、全く是れ法体の威徳のみ。

二、他力回向

二に、他力回向を顕す。

衆生聞名信楽の一念に、即ち是れ頓に他力回向の大行を領するものなり。一心相続して称名自ら現る。唯是れ仏行にして物の始作に非ず。是を以て之を摂して法体の処に帰し、他力回向の旨を顕示するなり。

三、大信特達

三に、大信特達を顕す。

信後の称名は唯是れ知恩報徳の益なり。故に称名を以て本の法体に帰し、以て大信特達の旨を顕すなり。

原ぬるに、夫れ、信後の称名は、宜しく十八願の乃至十念の句に属すべし。然るに吾高祖は、之を十七願に帰して諸仏称名の中に混入す。末学深く思はざるべけんや。

○寄末顕本

云何が末に寄せて本を顕す。

古人釈して曰く、口称に寄せて以て法体を顕すと、是なり。然るに今称名とは行者の口称に局るに非ず、具さに三義あり。

一、口業功徳

一に、口業功徳を顕す。

先ず標して「称無碍光如来名」と云ふ。是に於て即ち知んぬ、大行法体は是れ口業功徳にして、聞よりして得べきものなり。是の如き七字は、標挙の中に所謂称名是れなり。下に十七願成就を引くものは此相を詳かにするものなり。原ぬるに、夫れ、弥陀世尊は至徳の体（真実大行）を全うじて一嘉号に施し。以て衆生に恵む、是を口業功徳と為す。

然るに此口業を他の称揚に寄す（摂化便宜の故）。第十七願此が為に設く。如実讃嘆は、諸仏首唱し衆生随和す。法界の称名は只是れ本仏の口業功徳なり。

跋

二、真実大行

三、利他大行

是に於て称は名中に入り、名の他に称なし。但し末に在って之を視れば、称に由らざれば名なきが故に寄顕を須ふるなり。

二に、真実の大行を顕す。

同一名号にして真仮は見に随う。故に今如実讃嘆に就いて真実の法体を顕すなり。

三に、利他の大行を顕す。

若し直ちに行体に就いて釈せば利他の義、顕現し難し。故に今は称に約して大行を釈出す。称無碍光如来名とは即ち如実修行相応にして、所謂仏願の生起本末は要ず此に帰す。大行利他の義意、頓に現ず。下に結して「称名能破」と云ふも亦此意なり。

上来の諸義具足して文旨方に顕る。多義ありと雖も、終に十七願中の**称名**の二字に帰す。称は只是れ名にして、行者所聞の法体なるのみ。

柴門玄話（抄）

序

折節、笈を負ひて柴の戸を敲くものあり。むかへとへば、遠つ方よりあそびたりといふ。座さだまりてその物語をきくに、道心なき人とは思はれず。

客の曰く、

「はやくよりきく、高座行信の説は、頗る旧伝と別なりとかや。世上怪しむもの多く、おのれもこれを疑ふこと久し。願はくばそれをやすく説きいで、この茅塞せる胸襟を披かしめよ。」

略して浄土真宗の行信の法門を述するに、先ず六巻の文類に就いてその意義を弁じ、後に古今教導の風致を釈せん。

就文類弁意義

初に文類に就いて意義を弁ずとは、文類の所明ひろしといへども、その至要とするところのもの、行信の二法なり。この二法はともに衆生の上にて説ける法門なり。

教巻所詮

初の真実教といふは、即ち霊山所説の大経にして、大経の所詮は**願力**なり。文に云く、「説如来本願為経宗致、即以仏名為経体」と。本願名号は次の如く願力なり。因願果力更互に成就し、不離一体にしてよく衆生を摂す。これを他力と云ふ。不虚作住持の註に云々するが如し。

その願力を能被の法として衆生に授く。衆生それを住持して行信二法となる。一つの願力、二法となることは、所在に従ひて之を分つ。その体はただこれ願力なり。

法相表裏

既に開きて二法とす。これを序するに、或いは行信といひ、或いは信行といふ。これ義二途ありて、次序相反すること乃ち爾り。二途の義とは、**法相の表裏**と**禀受の前後**となり

行信次第

法相の表裏とは、所在に従ひて分つものにて、行は口称にて、外に形るものなれば表なり。信は心念にて、内に潜めるものなれば裏なり。すなはち法相別ありて、表裏を相成す。行を先にするものは、三法の建立ただ行あるが故に。後に信を明かすことは、この行かならず大信ありて相

因体超異

禀受前後
信行次第
因満分斉

法相表裏詳説

○寄顕所聞
［十七願は当分教巻・跨節行巻］

応して、自力の行にあらざるが故に。この次第のこころ、因体の超異をあらはすにあり。

禀受の前後とは、衆生、諸仏知識の真実教を受くるに、心に聞信するを最初となす。いまだ嘗て法のこれより先なるものはあらず。この故に、信を先にし行を後にす。この次第のこころ、因満の分斉を断むるにあり。

この二途はその関はるところ至りて大なり、学者忽せにすることなかるべし。

初に**法相の表裏**をもていふに、行とは、所在に従ひて分かつ中の口業の称名なり。故に釈して「大行者則称無碍光如来名」と。然るに口業の称名は、要門にも真門にも通じてあり。それを往相回向の大行とすることは云何といふに、まづこの大行といふは、第十八願の乃至十念といへる称名なり。故に標して「選択本願之行」といひ、偈には「本願名号正定業」といへり。

これ実に超過の法なれども、相似濫偽のものありて、その義顕しがたし。故にこれを第十七願に寄す。標願および引文の如し。

第十七願は諸仏称名にして、実の如く法体を顕すものなり。離自力之心とある称名は、不回向の行にして、即ちこれ如来回向の法体なり。これはもと諸仏の咨嗟を聞きて得たり。得るところの諸仏咨嗟のままにして、自力まじはることなし。すなはち所聞のところに寄せて能行を顕すなり。

諸仏の称名も衆生の称名も、彼名・此名、一名無二。ただこれ一本願の名号なり、されば不寄にして寄なり。諸仏衆生、能所別なるが故に、寄にして不寄なり。

これを諸仏称名の願とのみ標挙しては、不得意のもの誤りて、大行とは諸仏の称名にして、未

だ衆生の手に入らざるものと謂はんことを恐る。故に下に子註して「選択本願之行」というて、第十八願に乃至十念とある、正定業の機が行ずる称名念仏なることを知らしむ。

○能所不二の能行

或は此大行を所行の法体にして、衆生上の能行に非ずといふ。蓋し標挙のこころを解せざるなり。その法なんぞ彼此を岐たん。これを能行とすれば法体にあらずと思ふにや。法体を全うずる能行は、能行即法体なり。

○六要会通

またこれを諸仏上にあるものとして、衆生法に非ずといはば、真実教と何の別ぞ。教行同じく諸仏上の法ならば、その真実教は何の義利かある。行を衆生に約せずば、その証は何によりて得るや。

六要に所信所行といへるは、衆生禀受の上にて、能所を分別したるものにて、機教のこころをもて釈せらるるか。

○在内信心

次に信といふは、かの願力を回入して衆生の内心に在るものなり。願力こころに受けられて、自力を離れたるを信と云ふ。一信楽心、自力浄尽してただ願力これを存す。これを往相回向の大信とす。

願力の一因、所在に従ひて分かれて二とする。法相ほぼかくの如し。

○行信互顕

曰く、行や信やただ一願力といへども、その願力なること知りがたし。行と信と、相倚りてこれを顕す、その義云何。

曰く、大行とは称名なり、称名云何が願力なるや。

願力なることは、自力をすてて他力に帰すればなり。その自力をすてて他力に帰すとは、内心信受の相なり。この信をもて顕せば、その口業の念仏は、ただこれ願力の露現したるなり。願力とは名号なり。願力露現とすれば、称名といへる言辞は名をもて称を奪う。称念功なく、破闇満願ただこれ無碍光如来の徳義なり。

○信弁行意

次に大信とは、これは正しき機受の法にして、これいかなれば願力なる。

曰く、至心の体尊号なるときは、信楽欲生もその体別なく、ただ一尊号なり。その尊号とは大行なり。大行露現の名願力をもて信心の体を顕す。それ信心といふは、心中に快く名号を受けられたるなり。南無阿弥陀仏を内に在りて信心といふなり。かくのごとき信心潜隠にして知りがたし。潜隠の信心より、大行の称名生起して願力の法体露現す。その露現するものをもて、願力の大信なることを顕すなり。

○行顕信体

信行互顕してこれ自力にあらず、ただ一願力なることを詮するこころ、略してかくのごとし。此法相の表裏は、行信俱時相応の上の建立なり

次に、**禀受の前後**に就いて、信を先とし行を後として、円満の分斉を断むとは、常没の凡夫始て善知識に遇ひて、開悟せられて、阿弥陀如来の願力不思議をききうる刹那に、報土の真因、頓爾に満足して、さらに後刹那を須ひざるが故に。いはゆる信楽の一念これなり。

報土得生の因満の分斉は、正しく信楽開発の一念にあることにて、口業の発声はその後にありて、ただこれ報恩の行事、往生には関係なし。

禀受前後詳説

執持鈔に「本願を信じ名号をとなふれば、その時分にあたりて必ず往生はさだまるなりとしるべし」とあれども、彼は総じて平生を挙げて臨終に対する文にして、因満の分斉を剋示したるにはあらず。

○会通証巻

爾れば、なにゆえに「往生の心行獲得する」等とて行をいふ。

曰く、表裏の詮意は願力を顕すにあり。故に前後をも会すれば、いはゆる心行は所聞の名号の徳義にして、なほ願行と曰はんが如し。よくきくとき、回施によりて衆生の願行となる。これを「往生の心行獲得する」等といふ。

称名正因

宗蔵の中に称名を正因といへる文あり、銘文、文意等の如し。信心を正因といへる文あり、和讃の如し。信行共に生因とせる文あり、上に引くが如し。上来の意を得てもて向はば、左右源に逢ひて往くとして、罣碍するところなからん。

古今教道風致

後に古今の教道の風致を釈すとは、行信の二法をいふに、表裏前後の二途あること上の如し。共に七祖の伝へたまふところにして、我大谷聖人の如実に相承し、嫡流として家業を開き給ふ。その表裏に非ずば、もて真宗を標するに足らず。「念仏宗」と云ふが故に。もし前後に非ずば、もて行者を決定するに足ず。発信の所得、回向の全体にして報土の真因満足す。これを知らずして初念不定なれば、念々みな決定するときあるべからず。

具足して二途を宣説せざることをえず。これその製作の中、並びてこれあるを見る所以なり。

○斥異轍説

然るに菽麦を弁ぜざるたぐひ、法義の所在をわかたず、前後をもて概断せんとす。顕行の標挙

の如き、言の如く義を取りて、その行といふことは諸仏上の事とし去って、所聞の処において能行を示すことを知らず。「称無碍光如来名」も「称名破満」等も、みな諸仏の称名として、これを衆生に約して解することを許さず。

大谷を知らずして七祖を窺う、おもへらく異轍なりと。吁異轍にして而も彼を承くといふ。文類六巻その余の製作、ここに於て旧年の陳暦の如し、当時人を誘ふの権謀に出で、今にして用なければなり。

その上南天の大士より下黒谷の聖人に至り、その蹟異なれども、実に皆阿弥陀如来の智印を伝持して、濁世を開導し給うものなり。しかれども時処おなじからざれば、その布置するところ純雑なきにあらず。ただ真宗念仏に至りては、旨帰無二なること画一の如く然り。

○七祖一轍

南天の称名易行をの給ふは表裏なり。「念我称名」「信心清浄」等といふは前後なり。

北天の論の建章に、一心帰命といへるは前後なり。讃嘆門の如実修行は表裏なり。

註家の「十念念仏便得往生」は表裏なり。「此十念者依止無上信心生」は前後なり。

西河、表裏を以て浄土門を釈し給へども、その三不三信誨慇懃なるは前後なり。

宗家の序題門に「莫不皆乗」等は前後にして、付属の釈に「一向専念」とあるは表裏なり。

横川の念仏証拠門の中に「唯称弥陀」等とあるは表裏にして、往生階位に西河の三不信の釈を初に引き給ふは前後なり。

選択集の首章に表裏をもて「念仏為本」といひ、第八章に「信為能入」との給ふは、前後のころなり。

かく相承し給ふ故、尊崇配当して浄土真宗の伝灯の祖師とし、それを増損なく顕揚せる、これ大谷の他の傍流に超えて道統の嫡嗣たるゆえんなり。

名著復刻堂